

巻頭言

研究会誌の生命線「論文」と査読: 査読者の矜持

志保田 務

(I-LISS JAPAN 会長)

ISSN を得た逐次刊行物として、前身誌の期間を含め 5 年近くの実績を積んでいる。そんな本誌に最近、「レフリー制度があるか」というむねの電話がかかってきた。研究論文を軸とした紀要と自負する研究誌であるから、査読は確かに行っている。自らの所属やフルネーム、テーマを明かさず投稿志願を装って踏み入ってきたこの質問 (者) に、編集責任者は上記のように答えたが、不快感をいだいたという。

何のための質問だったのか。本誌への横槍か、あるいは執筆者攻撃が目的か。数年前の日本女性科学者の NATURE 誌掲載問題 (『あの日』講談社、2016.1) などに誘発されての追及なのだろうか。同件は理学の細胞の発見に関する世界的事案で、誰がみても本誌とは無関係だが、ただ単に「査読」という語において同じ土俵にあるとはいえる。査読の存在は記すべきで、本誌も改題以降明記し、会規約、付則で「投稿」、「執筆要綱」をも備え、英文タイトル・抄録のネイティブ・チェック、「査読」に言及している。だが先行誌では表示していなかった。それが、上記の追及を誘発したかもしれない。

ところで、査読の担当は編集陣を基盤とするという以外に公示の仕様がなない。レベルの高い人を編集陣に加え、それらの氏名を誌末にでも記すことになるだろうか。そこで、編集委員のレベルが問われる。何とか信頼を得られる人の選任が必要である。その信頼とは何か。査読者となる個人は、自ら著作を発表するという矜持を持つべきである。査読論文の分野に通じた者でありたい。だが委員 (数) には限度がある。外部を含め拡大編集委員会を形成し、全体で対処するほかない。後者の場合、謝礼といったものも定めておくべきであろう。また記事種別に査読レベルを内規にしておくことも考えられる。

査読行動では、投稿を活かす査読を基本とし、論理指摘は構造面や、投稿規程の順守などを基礎とし、投稿意欲の減殺を防ぎたい。例えば誤記や文献渉猟に関する批判は抑えつつ、校正は忠実にを行うとする行き方が望ましい。査読者と掲載記事種の変更が率直に会話できる風土も必要である。「変更」のポイントが引用精度、記載法に関することもあるが、引用記載法に関しては著者の意志に寛容の方がよいであろう。

編集員長は以上に関する庶務を、編集委員会、役員を含む拡大編集委員会を土台に行い、査読結果に責任をもつ。また査読に関する外部との通信に唯一の窓口となる。先に紹介した外部からの「質問」は執筆者個々人にも及んだようであるが、個々人では回答せず、編集委員長に取次ぐべきであろう。

外に目を転ずると、拙文執筆中 2021 年 5 月 1 日『メタデータ評論』の発刊 (Web up) に接した。創刊を祝したい。その<投稿規程>には「論文 (査読請求論文, 一般論文), エッセイ, 研究ノート (未定稿の論文)[以下略]」のカテゴリーがある。ただ「論文」そのものの定義は我々同様定かでない。

この記念すべき創刊号は、巻頭研究を3本も揃えている。だが、いずれも「研究ノート」と分類されている。「研究ノート」の定義は彼らによれば「未定稿の論文」である。いずれも本格的な論文と思われるが、著者の矜持、謙虚さに基づく粹取りかもしれない。とりあえず本誌にあっては「論文」, 「研究ノート」について定義を加えたいと願う。論文や査読が深刻化する時代かもしれない。だが、内外に翼を広げ自由に研究を楽しみたいものである。